

## **2019 年度事業計画**

ソニー創業者の井深大は、日本の発展のためには、子どもたちの理科教育が重要であると考え、1959 年に、「ソニー小学校理科教育振興資金」の贈呈を始めました。その後、中学校を対象に加え、2002 年には、幼児教育にまでこの教育助成活動を拡大し、今日にいたっております。行政、小・中学校や園の関係者の皆さまの長きにわたるご支援やご協力によりまして、2019 年には教育助成 60 周年を迎えます。当財団は、「科学する心を育てる」および「科学が好きな子どもを育てる」を主題に、科学を通して、好奇心や創造力を伸ばし、勇気をもって新しいことに挑戦していく子どもたちを育てることに情熱をもって取り組む方々や、学びの場を支援してきております。この節目にあたり、これまでの活動を振り返ると共に、小・中学校の学習指導要領や、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂などの新たな環境の変化を踏まえた上で、次の 10 年への新たな歩みを確実に進めてまいります。

### **1. 幼児教育への支援**

「科学する心を育てる」が当事業の主題であるが、応募が毎年増加している「教育実践論文」、一昨年度よりスタートした「全国幼児教育特別研修会」、論文の入選園が開催する研究会・発表会、毎年発行する「実践事例集」などのあらゆる機会や媒体を活用し、乳幼児期の「感性・創造性」の重要性についての継続した訴求を通じて、園の活性化や保育者の資質の向上に貢献する。また、本主題を目指す保育の実践が、昨年度より改定された、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領に沿った幼児教育の実現と保育の質の向上に繋がるとを、上述の各種研究会・発表会や実践論文の事例などで明らかにしていく。

#### **(1) 教育実践論文の募集 (ソニー幼児教育支援プログラム) …「公1」**

①2017 年度の 126 園 (前年度比+17 園) に引き続き、2018 年度は 146 園 (前年度比+20 園) となり、2002 年度の本プログラム開始以降、最多の応募となった。保育園や幼稚園からの応募数は若干の増であるが、認定こども園からは倍増している。認定こども園の増要因として、認定こども園として新たにスタートする際に、「園の教育の質の向上を図り、外部の評価を得るために、本プログラムへの取り組みが有効」と考えられたことが挙げられる。また、論文や応募票からは、本プログラムによる研究会や「実践事例集」などの資料を参考にしたり、本主題の活動についての紹介を受け、「科学する心」の視点をもって保育に取り組んだりした結果、保育の質の向上に繋がることを実感されている園が増えていると推察される。このことは、論文数の増だけではなく、地域で自主的に継続して本主題に取り組む研究会「地域自主研究会」を開催する地域が増えている実態からも伺える。加えて、園の希望により実施する研修会や論文説明会の開催についても、応募経験のない園や地域からの積極的な要望により実施する機会が増えており、本プログラムの成果を認識される地域や園が増えていると捉えている。

②過去の応募園や市区町村の保育課・教育委員会への協力要請をはじめ、ソニー科学教育研究会 (SSTA) の教員を通じた各地域の園への積極的な広報や、保育に関する諸研究団体 (保育学会、全国幼児教育研究会など) への働きかけを継続して行っている。その成果として、今年度は、過去に応募した園からの再応募や、執筆経験のある保育者からの応募が増えており、過去の実績を踏まえた上で、以降の保育実践をまとめた論文が高い評価に繋がっている。

③上述の通り、論文に取り組む実績のある園や、連続応募の園が引き続き本主題に取り組むことに魅力や意欲をもてるよう、「園内研究会」に関する情報を意識した普及活動を計画している。加えて、初応募園を増やすことにも注力し、応募実績のない地域を対象とした普及活動では、保育メモや写真などの記録を活用し、負担なく保育を振り返り、レポートにまとめることで、保育の充実が実感できるワークショップや事例の紹介などを行う。さらに、これらの機会が、保育者の保育実践への支援に繋がる有益な機会となるよう、対象となる園や保育者の実態、並びに課題やニーズの把握にも努める。

## （２）保育の質の向上を目的とした「発表会・研究会」などの開催

### ①「最優秀園実践発表会」の開催 … 「公１」

2018年度に最優秀園を受賞した、「奈良市立鶴舞こども園（奈良県）」では6月1日（土）に、「学校法人山梨学院 山梨学院幼稚園（山梨県）」では6月29日（土）に開催が決まった。記念講演として、奈良市立鶴舞こども園は、白梅大学 名誉教授 無藤 隆氏を、山梨学院幼稚園は、東京大学大学院 教授 秋田 喜代美氏をそれぞれ講師として招聘する。近年、本発表会に参加する保育者は200～300人と多く、参加者が「科学する心」の理解を深め、保育の質の向上に寄与する有益な会となるよう、各園の開催を支援していく。

### ②「優秀園実践提案研究会」の開催 … 「公１」

2018年度に優秀園 審査委員特別賞を受賞した、「札幌市立もいわ幼稚園（北海道）」については、研究会の開催が8月30日（金）に決まった。また、優秀園（10園）は、自主的な開催としており、初入選した園や、研究会が少ない地域での開催を重点的に働きかけることで、開催園はもとより、地域から参加される保育者の資質の向上に寄与していく。また、保育者のみならず、周辺の小学校や各種教育機関への参加を働きかけることで、今後、ますます重要視される、保幼小連携を踏まえた活発な意見交換の場としていく。

### ③「全国幼児教育特別研修会」の開催 … 「公３」

「科学する心を育てる」保育を継続して実践している園から意欲的な保育者を募り、事例研究やワークショップ、講演会などを通して保育の質の向上を目指す3回目となる研修会は、「保育者の協働的な学び」に焦点を当てて開催する。本年度は、8月23日（金）～24日（土）の日程で、ソニー本社を会場に行うことを決定している。他に類のない充実した研修会を目指すため、事前アンケートにより、同じテーマを共有できるグループを編成し、グループリーダーを中心に電子メールを活用した事前のグループワークを重ねる。当日は、各自、事例を持ち寄り、事前課題を深めるグループ協議を行う（研修者には交通費を助成）。また、2日目は、全国の園から公募した応募者も加わり、グループに分かれて事例検討を通じた意見交換を行い、保育の視野を広げ、互いに研鑽を深める機会とする。最後に、講師の東京大学大学院教授の秋田喜代美氏より、ご講演と全体講評をいただき、以降の活動への礎とする。

### ④「地域自主研究会」の推進 … 「公３」

2014年度より、地域で5園以上が自主的に集い、「科学する心を育てる保育」を目指すと共に、これを地域に広げることを目的に取り組む研究会に対し、毎年、活動費を助成している。活動が継続している大阪、奈良に加え、昨年度より北海道、山梨、長野、兵庫、大分でも発足し、熱心に研究会が行われている。提出される報告書などで活動の実態や成果を把握しつつ、密な連携により支援して行く。本年度は、本研究会に関する問い合わせがある地域や、今後の活動が期待される地域（山形、新潟、沖縄など）への働きかけを行うことで、対象地域を広げていく。

### ⑤「他園に学ぶ保育者研修」の実施 … 「公３」

2016年度より、“意欲の高い保育者”が、優れた実践を積み重ねている園を訪問し、その保育に直接触れて自ら学

ぶ機会としたり、“保育の質の向上を目指す園同士”が、互いの保育に触れ合ったり、学びを交流したりする新たな研修の機会を提供する支援を継続している。参加者や園からの報告書や感想には具体的な成果が示されており、保育を見直す契機や論文応募への動機付けとなったなど、「有意義で貴重な機会」との高い評価を得ている。

**a) 「保育者の交流」**： 昨年度と同様、最優秀園（2園）および優秀園 審査委員特別賞の受賞園（1園）が開催する発表会や研究会への参加者を、全国の保育者から各回5名（計15名程度）を公募し、交通費を助成する。これにより、主題に迫る保育実践に触れたいとの意欲を持ちながら、遠方であることから参加を諦めていた保育者には参加の機会が得られることとなり、参観や協議、報告書の作成を通じて、保育の質の向上を目指す「保育者の学びの場」となっている。また、提出された報告書は、他園の参考となるよう、この一部をホームページに公開する。

**b) 「園と園を結ぶ交流」**： 主題「科学する心を育てる」に取り組んでいる園同士が、相互の保育や研究会を通じて交流し、「他園の保育に学ぶ機会」を提供する。園同士の情報や意見交換は、保育方針、環境や保育者研修などの具体的な保育の工夫に踏み込んで行われるため、他の研究会とは違う、園の実態に添った成果を得ることに繋がっている。本年度は、相互に交流する2園を2組（計4園）選定する。相互交流の仕方については、各園の実情を踏まえて自由に設計いただくこととし、各園には運営費と保育者が相互に訪問するための交通費を助成する。

### ⑥保育者ネットワークの構築 … 「公1」

2017年度より、論文を応募された園の研究代表や保育者、各種研修会や研究会（上記①～⑤）への参加者などを対象に、財団が関わる、主題「科学する心を育てる」をテーマとした研究会などの有用な情報を提供するため、月1回の頻度で、希望者への「メールマガジンの配信」を始めた。「人的ネットワーク化」の方策としても有益であり、読者からの声も踏まえて、内容を充実させて行く。

### （3）実践事例の紹介 … 「公1」

応募論文より優れた実践事例を取り上げ、月2回の頻度で、財団のホームページに「保育のヒント」として、新たな事例を掲載しているが、これまでに蓄積された事例は800件（22項目に分類）を超えており、アクセス数も多い。本年度は、園内研究や保育者間の連携、地域や保護者との連携など、園の教育力をより豊かにする工夫にも焦点を当てるなど、引き続き充実させて行く。また、当年度も、「科学する心を育てる実践事例集（Vol.16）」を、乳幼児の主体性を重視する保育の4つの観点、「観る、支える、工夫する、振り返る」に焦点を当てた構成で編さんし、5月以降、各地の研究会などで幅広く活用する。今回も、保育の質の向上を目指し、園内研修に取り組む園や、保育者の参考になる事例を多数掲載している。保育者に加え、多くの保育関係の専門家や、保育者を目指す学生からの配布の申し込みが増えており、今年度も6,000部を準備する。

### （4）「科学する心を見つけよう」フォトコンテストの実施 … 「公1」

保護者を対象に、第13回となる「科学する心を見つけよう」フォトコンテストの作品を募集する。4月には、入選作品をホームページに掲載すると同時に、各地の科学館と連携して展示するなど、フォトコンテストの普及を図る。また、第10回を記念して作成した写真集「科学する心みつけた！」の冊子は、保護者や幼児教育関係者のみならず、保育者養成校の授業の教材や、新人保育者の育成の場で活用されるなど、「科学する心」の理解の促進にも繋がっている。

### （5）「心をはぐくむ」冊子 … 「公1」

井深ファウンダーの子育てに関するメッセージを編さんした冊子「心をはぐくむ」は好評を得ており、保育所・幼稚園・認定こども園などから要望があり、主に保護者を対象に既に4万1千部を配布している。今年度も、前記（4）の写真集と一緒に配布するなど、趣旨を浸透させていく。

## 2. 子ども科学教育への支援

「科学が好きな子どもを育てる」を主題に、教育実践と次年度計画に関する論文を募集し、優れた取り組みの学校に対して助成を行うのが「ソニー子ども科学教育プログラム」である。最優秀校は受賞の翌年に、「子ども科学教育研究全国大会」を開催し、全国の教育関係者にその取り組みを公開している。

### (1) 教育実践論文の募集（ソニー子ども科学教育プログラム） … 「公1」

2018年度は、論文応募数の減少を回避するために、ソニー科学教育研究会（SSTA）の常任理事や各支部の理事に協力を仰いだり、各地域で行われるSSTAの研修会にて積極的に論文に関する説明を行ったりしたが、応募数は微減となった（昨年度：180校、本年度：172校）。応募数が増えた地域もあるため、そこでの普及に向けた施策なども参考に、本年度の論文応募数の拡大に繋げて行く。また、SSTAが主催する「全国特別研修会」や「若手教員研修会」などに参加した教員に対して積極的に働きかけを行い、論文の書き方に関する学習会を含めて、手厚くサポートしていく予定。特に、本年は教育助成60周年を迎えるため、以降の論文の活性化に繋がる節目としたい。

### (2) 「子ども科学教育研究全国大会」の開催 … 「公1」

2018年度は、小・中学校の各1校が最優秀校を受賞しており、小学校は、鹿児島大学教育学部附属小学校で2019年11月29日（金）に、中学校は、岐阜市立陽南中学校で2019年11月22日（金）に、「子ども科学教育研究全国大会」を行う予定。全国の小・中学校の教員、ソニー科学教育研究会の会員や教育関係者などが参集し、理科教育に関わる情報交換や教員同士の交流を図る。この全国大会を通じて、「科学が好きな子ども」を育てる取り組みが全国各地に広がり、活発な活動が展開されることを期待している。

## 3. 教員に対する支援

1963年に、「ソニー理科教育振興資金」の受賞校を会員として、「理科教育振興資金受賞校連盟」を結成。ソニー教育財団（当時はソニー教育振興財団）は、同連盟が行う教員への研修活動などを長年にわたり支援してきた。2002年には、同連盟が「ソニー科学教育研究会（SSTA）」に改組されたが、以降も積極的に支援を続けている。また、全国中学校理科教育研究会、全国小学校理科教育研究協議会、日本初等理科教育研究会などの志を同じくする団体にも、各団体の独立性を尊重しつつ連携支援を行っている。

### (1) ソニー科学教育研究会（SSTA）への支援 … 「公3」

SSTAは、「科学が好きな子どもを育てる」教育を、情熱をもって推進する教員の自主的な集まりであり、全国に47支部、2千名を超える会員を擁している。各支部で行われる独自の研修会に加えて、支部から教員が集って開催される3つの研修会（全国特別研修会、ブロック特別研修会、若手教員研修会）があり、当財団は、財政面のみならず、企画・運営面においてもこれらの活動を支援している。

#### ① SSTAの活性化

SSTAの会員の実態として、メンバーの固定化や高年齢化の進行などがあり、若手教員の参画をどう促すかが課題となっているが、理科への苦手意識や、育児などの家庭生活との兼ね合いもあり、改善には至っていない。また、研修会を行うにも、土曜授業や小・中一貫授業などで土曜日に参集しにくい傾向が強まっている。一方で、若手会員が増えている地域もあるため、そこでの活動を参考に、活性化策を検討して行く。例えば、研修会への参加のハードルを下げするために、専門的な内容ではなく、授業にそのまま展開できる実践を伝授する、手作り教材などを参加のお土産として渡す、家族も一緒に一泊の研修会に参加できる、などの諸施策を効果的に活用することで、会員の拡大にも繋げて行く。加えて、論文応募を促すために、支部で研修の推進を担うリーダーが各地域で集まり、地域の実情も踏まえて、教員に働きかけるための具体的な方策を検討する、などの案もあり、財団としても積極的に支援して行く。

## ② 「全国特別研修会」の開催

本研修会は1期2年とし（今期は9期目）、「科学が好きな子どもを育てる授業の創造」を研究テーマとして、先進的・開発的な研究に取り組み、その成果を全国に発信する。研修員は、指導案作成や授業実践を通して、研究の視点や方法について学ぶと共に、リーダーとして求められる資質や人間性を一層高めることを目指す。本年度は、7月26日（金）～29日（月）の日程で、昨年度と同様、丸紅多摩研修センターにて開催する。今期の研究のサブテーマである、「子どもが、学びを活かしながら変わる自分を楽しむ授業の創造」に取り組み、2年次となる本年度は、2018年度に作成した指導案の各校での授業実践を踏まえ、その成果と課題をもとに、研究に取り組む。

## ③ 「ブロック特別研修会」の開催

本研修会は、各支部で行っている研究の交流と深化を目指して、全国を4つに分けたブロックごとに開催され、主に中堅教員が集い、理科・生活科の授業実践を中心に、単元計画や指導案の作成などを行う。また、理科教育の中心的な立場で活躍される指導者から最新の情報を享受し、直接指導を受けて学ぶ場でもある。本年度は、8月初旬から中旬にかけて、2泊3日で、東日本ブロックは北海道旭川で、中日本ブロックは石川県で、西日本ブロックは徳島県で、九州ブロックは大分県で開催される。

## ④ 「若手教員研修会」の開催

本研修会は、教職経験の浅い若手教員を対象に、理科教育の魅力を実感しながら実践的な指導力の向上を図ると共に、SSTAの活動を多くの若い教員に認識してもらう良い機会と位置付けている。

開催の目的は以下の通り。

- ・自然の事物・現象に教員が自ら親しみ、その感動を子どもに伝えられる教員になる。
- ・基本的な実験・観察の技能を身につける。
- ・理科の指導案を具体的に立案できる力を身につける。
- ・他支部の教員との交流を深め、切磋琢磨し合える仲間を作る。

本年度は、6月に1泊2日で、宮城県、東京都、愛知県、香川県、福岡県の5カ所で開催される。

## ⑤ 「理科みらい塾」および「理科みらい講座」の開催

**a) 「理科みらい塾」**：SSTAの若手教員の育成を目的に、「科学する心」を育むうえで大切な、「自然を観る目」と「実験・測定結果から科学の原理・法則を見いだす目」を実験によって身に付ける機会として、昨年度に続き、「第5回 理科みらい塾」を8月（1泊2日）と3月（日帰り）に開催する（参加者は20名程度）。加えて、本塾に参加した教員の継続した育成と、本塾で学んだことの確実な授業での実践を目的として、卒業生から希望者を募り、受講したテーマに関連する原理・法則の理解に有効な、小・中学校の学習での「体験」を洗い出すなど、具体的な単元への展開を1年間かけて取り組む。

**b) 「理科みらい講座」**：全国の多くの教員に、「科学の原理・法則」を実験や測定を通じて学んでもらうために、2016年度より、SSTAの支部に出向いて行う「理科みらい講座」を開始。本年度は、「プログラミング教育に関する講座」の開催に重点を置くため、頻度を減らして開催する。また、SSTAの活動の浸透や活性化を目的に、会員でない方を対象とした講座も、必要に応じて開催する。

## （2）STEM教育およびプログラミング教育への支援強化 … 「公3」

2020年度の学習指導要領の改訂による新たなプログラミング教育の導入に伴い、当財団としてもこの支援に向けた体制づくりに引き続き取り組んでいく。具体的な施策は以下のとおり。なお、2017年度と2018年度に、(株)ソニーグロ

ーバルエデュケーションが開催した「ロボットコンテスト」に協賛したが、今後の展開については改めて検討する。

#### ①ソニーのプログラミング教育機材（MESH）の活用

2018年度に、SSTAの教員にMESH（ソニー(株)が手掛ける電子ブロック）を貸し出し、小学校約20校で授業実践および単元の検討が行われた。この授業実践から得られたプログラミング教育のノウハウを多くの学校で活用できるよう、財団のホームページやSSTAの会員誌「SSTA通信」などで引き続き公開する予定。また、2020年度の本格導入が近づくにつれ、プログラミング教育の導入を検討する学校が増えつつあり、本年度もMESHを使った授業実践を希望する学校に対し、貸し出しを継続する。

#### ②教育者向け「プログラミング教育実践交流会～教科の学びを深めるために～」の開催

理科、算数、総合的な学習の時間に加え、社会、図画・工作等の様々な教科を対象に、これらの教科の学びを深めることに生かす、との視点で「プログラミング教育」を考え、交流し、実践に繋げることを目的とした「プログラミング教育実践交流会」を、2019年8月4日（日）に、ソニーシティ大崎を会場に開催する。

この交流会は、a) 授業の実践者による「ポスターセッション」「ワークショップ」「模擬授業」を通じた実践交流、b) 文科学、大学関係者による「パネルディスカッション」を通じた情報提供、にて構成の予定。授業の実践に関する具体的な情報を得ると共に、「教科の学びを深める」ためのノウハウを学んでもらうなど、「プログラミング教育」の着実な実践に繋がってもらうことを目指す。

#### ③「プログラミング的思考」を理解し授業に取り入れるための「研修会」の実施

「プログラミング的思考」を、「物事の仕組みを理解し、改善したり、新たなものを創り出したりする上で重要な思考」と捉え、2018年度より、SSTAの支部に出向き、ワークショップ形式にて体験を通じた理解を深め、授業での実践を支援する研修会を開始。2020年度までを重点期間と位置付け、本年度も、より多くの教員が、「プログラミング的思考」を深められるよう、支援していく。

### （3）海外の教育団体との交流活動 … 「公3」

海外の優れた教育システムや授業実践を学ぶ機会とするため、2010年度より、オーストラリアの全国的な理科教員の研究組織であるASTA（Australia Science Teachers Association）との相互訪問を行っている。日本の教員のオーストラリア派遣については、本年度も引き続き、SSTAの教員を対象に参加希望者を募る。本年度は、これまでの学校訪問に加え、新たに、オーストラリアと日本の科学教員と一緒に教材研究をしたり、実験をしたりすることを計画している。場所は、日本とオーストラリアの共同事業で建てられた「クエスタコン（国立科学技術センター@キャンベラ）」を予定している。オーストラリアの教員の来日も既に確定しており、小・中学校と高校（SSH：スーパーサイエンスハイスクール）への訪問を予定している。

### 4. 科学の泉－子ども夢教室 … 「公2」

「科学の泉」は、『自然に学ぶ』をテーマに、小学校5年生から中学校2年生までの約30名の塾生が参加し、白川英樹理事を塾長に、指導員として全国から公募した小・中学校の教員の協力を得て開催している自然体験教室である。2005年度以降、毎年開催しており、今回で15回目となる。本年度は、8月4日（日）～9日（金）に5泊6日の日程で、昨年に引き続き、新潟県十日町市当間高原にて開催する。指導員7名の選考は終わっており、北海道、埼玉、千葉、愛知、京都、大阪、福岡の教員が参加する。塾生は、2019年3月から公募の予定。

### 5. ソニーものづくり教室 … 「公2」

ソニーの技術者やSSTAの教員が講師や指導スタッフとして、小学校高学年～中学校の児童・生徒を対象にした「も

のづくり教室」を開催し、科学への興味や関心を高める活動である。今年度も、ソニーグループ会社や SSTA の支部への継続した開催支援と、開催地や回数を増やす働きかけを行う。また、プログラミング教材を使ったイベントを増やすために、2018 年度にソニー（株）と共同で制作した、「MESH プログラミング工作ワークショップ」の認知度向上のため、説明会などを実施する。さらに、「ものづくり基金」への寄付者からの要望により、2018 年度からスタートさせた理系高校生向けのカリキュラム「ソニーのエンジニア体験」についても、継続して開催できるよう、ソニー（株）に協力を要請する。

## **6. 対外広報活動 …「公1」**

財団の活動の柱である、論文募集の“オンライン化”を導入し、教員がインターネットを通じて、論文に応募できる仕組みを整える。また、同じ仕組みを利用した、「フォトコンテスト」のインターネット応募に向けて、ユーザーインターフェースを改善させる。また、2014 年 4 月から利用してきた、財団の Web サイトの CMS（コンテンツマネジメントシステム）が 2019 年度に利用できなくなるため、Web サイトを他のサービスに移行する。加えて、財団が掲げる「科学する心」の理解を深めるため、引き続き、魅力ある「Facebook」の運営、プレスリリースの配信、教育関連新聞や地方紙を中心としたメディアへのタイムリーな情報発信にも努め、限られた予算を有効に活用した広報活動を継続する。

## **7. ソニー教育助成「60 周年」記念 …「公1」**

1959 年に開始した、「ソニー小学校理科教育振興資金」が 60 周年を迎えることを受け、2019 年度の「贈呈式」にて、これを記念した表彰を検討する。また、幼児教育に関する、『60 周年記念事例集』の発刊や、小・中学校の教員を「子ども科学教育研究全国大会」に特別枠で招待することなどを検討する。

以上